

緑化だより

No.141 平成30年8月号



コツククシサワゴケ

7月の豪雨被害のため、しばらくの間閉園します。

- | | |
|------------------|----------------------|
| ○ 臨時閉園について(お知らせ) | ○ 昆虫の話(ギリギリは夏の昼のムシ!) |
| ○ 季節の花(カラムシ) | ○ 小さな世界こけ(真夏のコケ) |



ひろしま 緑化センター

広島県緑化センター・広島県立広島緑化植物公園

〒732-0036 広島市東区福田町 10166-2

TEL 082-899-2811 FAX 082-899-2843

URL <https://ryokka-c.jp> E-mail hiroshima@ryokka-c.jp

臨時閉園について(お知らせ)

初めに、この度の7月豪雨により被災された皆様に心よりお見舞い申し上げますとともに、1日も早い復旧をお祈りいたします。

当センターにおきましても、これまでにない甚大な被害を受け臨時閉園をせざるを得ない事態となりました。

日頃から当園をご利用いただいている皆様方には大変なご迷惑をおかけしておりますが、早期復旧、早期開園を目指して鋭意努力を続けているところです。何卒、今しばらくお待ちいただきますようご理解、ご協力をお願い申し上げます。

〈被害概要〉

当園は麻下川の源流域にあり川の傾斜が急峻なため、この度の豪雨により園内各所で麻下川が氾濫し、また、谷筋からの大量の水が水路を越流し、小河原側からの進入路(車道)の路肩崩壊や洗堀が園内各所で発生しました。また溪流沿いの木々も根元が洗堀されて多くが倒れ、あるいは傾き危険な状態になっています。東山、西山作業路も上方からの土砂崩れなどによって通行不能となりました。

また林道(福田～瀬野川)から福田側ゲート横を通って崩壊土砂が流入、ロマンス池、ふれあい池などにも大量の土砂が流入、堆積しました。これらの要因によって園内遊歩道も利用いただけないルートが多数発生しています。

このような状況では車両の通行や遊歩道の利用について安全確保が難しく、ご来園の皆様へ安全にご利用いただくことが困難でございますのでやむを得ず臨時閉園とさせていただきます。

なお、園内の建物(本館、レストハウス等)広場(多目的広場、集いの広場、わんこ広場等)は幸いにも被災しておりません。

再開園時期につきましては、おって広島県ホームページ、広島県緑化センターホームページ、緑化だより等によってお知らせする予定です。

平成30年7月末日



広島県緑化センター管理事務所

～ 森林公園・こんちゅう館 臨時閉園のお知らせ ～

7月の西日本豪雨のため、土砂災害が発生しました。現在、園内の復旧作業を行っていますが、安全を確保する必要がありますため、当分の間**臨時閉園**します。再開につきましては、目途がついた段階で、改めてお知らせします。ご迷惑をおかけしますが、ご理解とご協力をお願いいたします。

季節の花

カラムシ

「むしぶすま 柔(なご)やが下に 臥せれども 妹と寝ねば 肌し寒しも」

藤原 麻呂

萬葉集卷 4:524

これを訳しますと

(苧麻(ちょま)で出来た柔らかく暖かい寝具に、この身をすっかり潜らせて冷え込む夜を寝ていても愛しいあなたが居ないと心も肌も寒いのですよ)

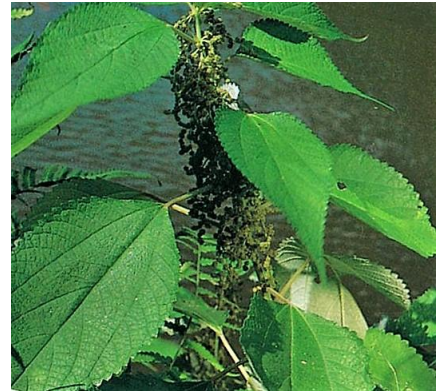
この歌は藤原不比等の四男の藤原麻呂が恋人の坂之上郎女(さかのうえいらつめ)に贈った歌です。

カラムシはイラクサ科の多年生草本で、アカソやヤブマオと同属、雌雄同種です。きれいな花びらがなく目立たない花なので、今は見向きもされませんが、日本を含めてアジア地域で、古くから植物繊維をとるため栽培されていました。別名は苧麻(ちょま)です。

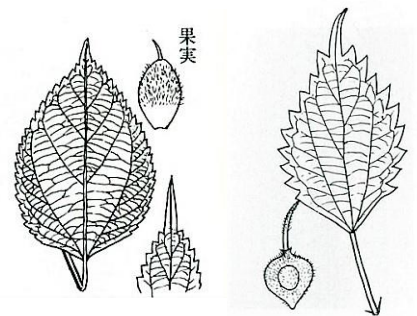
飛鳥時代の西暦 693 年頃に、持統天皇の勅命で、カラムシから衣類、紙、漁網などがつくられて、国は経済的に潤っておりまし。越後の国は日本一のカラムシの産地だったようで、『日本書紀』にも記載されています。朝廷に貢納されたものが奈良の正倉院に収蔵されています。上等な織物はすべて苧麻で作られたものでした。

カラムシは春に植えて夏に茎を刈り、皮をそいで中の繊維を取り、灰汁につけて水でさらすと、美しい光沢のある糸が取れます。江戸時代には新潟県魚沼地方はカラムシの名産地で、夏の麻布である「小千谷縮」、「越後上布」の原料となっています。現在は「小千谷縮」「越後上布」は国の重要無形文化財に指定され、2009 年にはユネスコ無形文化財にも登録されました。戦国時代末期にワタが渡来すると、栽培が容易で、染色性に優れ、吸湿性のある木綿が急速に広まり、カラムシは衰退して行きました。かつて栽培されていたカラムシですが、今は野生化して林縁や山際で繁茂しています。

緑化センター内では仲間のコアカソはありますが、カラムシは見るできません。(上村)



カラムシ(野草図鑑⑦保育社より)



カラムシ

コアカソ

(野草図鑑⑦保育社より)

昆虫の話

キリギリスは夏の昼のムシ！

夏真っ盛りのお昼どき、外から子供やセミの声ですら聞こえなくなるような酷暑のさなか、荒地の草むらでは「ギーチョン、ギーチョン」とキリギリスが鳴いています。

キリギリスは近年分類が進んでいる昆虫の一つです。彼らは大きなおなかで邪魔をして、その短い翅では長距離を飛ぶことができず、移動性が低いためののか、地域的な変異が多く知られています。そして、地域によってその鳴き声や翅の長さなどが若干違うことから、

いくつかの種に分けられることが昔から指摘されていました。しかし、形態的な特徴だけでは確実に見分けることが難しいため、近年になって遺伝子を使った分類が進んでいます。結果として、もともとのキリギリスは東西の2種類に分けられました。

西日本(近畿以西)には「ニシキリギリス」、東日本(岡山以东)には「ヒガシキリギリス」が生息しています。広島にはニシキリギリスしか生息していないので同定で迷わなくて助かります。

彼らはいつも「秋の鳴く虫」展に出すべきなのか議論になる虫です。非常に有名な鳴く虫なのですが、自然界での寿命は8月いっぱい、しかも、昼によく鳴き、夜に鳴くことはほとんどありません。このため、企画の趣旨とは合わないということで出されないことが多いです。

しかし、和歌や俳句などに詠まれる「キリギリス」は秋の季語、童謡「虫のこえ」にも出てきます。秋の頃にはいなくなるこの虫がなぜ?という感じです。実は、そこで出てくるキリギリスは「コオロギ」の事を指しているのです。「虫のこえ」では鳴き声が「きりきりきりきり」と紹介され、明らかにキリギリスと異なっています。キリギリスを俳句の題材に使うときには季語や風景の描写に気をつけないといけませんね・・・。

青々と茂る草原から、彼らの呑気で間抜けな「ギーチョン」という鳴き声が聞こえてくるとただでさえ暑い周囲の温度が1,2度上がる気がします。彼らにはもうちょっと涼しげな音で鳴いて欲しい所です。(広島市森林公園こんちゅう館 藤井)



ニシキリギリス (オス)



ニシキリギリス(メス)
腹の先に剣のような産卵管がある

小さな世界 こけ

真夏のコケ

高温が続き、雨も降らない夏、スギゴケを見ると、葉を茎に巻き付けるようににつけ、乾燥に耐えています。下のほうの葉は枯れているようにも見えます。根から水分を取ることのないコケは、どのように過ごしているのでしょうか?

スナゴケ、ヒジキゴケ、ギボウシゴケなど樹幹や岩の直射日光の当たる場所に着生するコケは、乾燥すると葉を茎に密着させたり、縮れたりして休眠します。ひなたのコケは体内の水分が失われて乾燥すると活動を停止します。そして朝露や雨などの水分が得られたら、全体で吸水し光合成を始めます。体内の水分がなくなり、乾燥してもやり過ごす能力を持っているのです。

ギボウシゴケの仲間は、乾燥容器の中で15ヶ月、ヒジキゴケは乾燥状態で7ヶ月置いても変化がなかったとの記録があります。繊細でデリケートに見えるコケですが、実は過酷な環境に柔軟に適応し、したたかに生き延びています。(山根)



炎天下のスギゴケ



水を吸ったあとのスギゴケ